

住職 近況

まったくもって自慢にもなりません、生まれてこのかた、予習というのが嫌いです。あらかじめ習うには、積極的な意欲と根気が必要です。そうした律儀な性格とは縁遠いズボラ者には、無理な学習方法でした。そんな私が、残暑厳しき九月から参考書を何冊も買って、十月の旅行の予習を始めたのですから驚きです。

キーワードは冷泉家（れいせいけ）です。盆と彼岸のご案内でお知らせしたとおり、本山妙心寺の微笑会が企画する「信を深める旅」で今秋訪れたのが、冷泉家でした。微笑会は本山妙心寺の文化財保護を目的とした親睦の会です。例年、普段は門を閉ざしている穴場に連れて行ってくれる催しですが、今年は格別です。

冷泉家のご先祖は百人一首を編集した藤原定家。それ以後、八百年間にわたり途切れることのないお公家さんのおやしきが、京都御所の北方に現存していて、それをを拝観するのだから、予習しないわけにはいきません。しかし、参考資料を読めば読むほど、不思議な家です。

現在の地に居を構えたのは、慶長十一年（1606年）だといふから、四百年間一度も引っ越しをしていない。明治維新で天皇が京都から東京に移られた時、他のお公家さんは東京に移っても、冷泉家は動かなかった。その結果、平安時代からの書物が守られます。形が有る文化財が守られただけではなく、形の無いお公家さんの年中行事も伝えられているのが貴重です。

もちろん、有形文化財が残ったから行事も残ったのですが、その逆も真ではないでしょうか。つまり、何百年も伝わる年中行事を続ける強い精神力があったからこそ、奇跡的に文化財という「物」が残された。心があるから、物がのこるのです。現当主夫人の冷泉貴実子さんが、自著で次のように述べています。「年中行事というのは、結局は文化なのだ。正月にお餅を食べるのも、お盆に墓参りするの、まさに日本の文化に相違いない」（『冷泉家歌よみ』京都新聞出版センター刊）

さて、慌ただしい師走になりました。お公家さまのような由緒正しいしきたりはないけれど、一つくらい手間をかけた正月支度を試してみてもどうでしょうか。心があるからこそ、物のこるのです。